

東京包装材料商業協同組合（東包材、田中克明理事長）は例年、組合員・賛助会員企業の若手社員に向けて「東京包装高等専門学校」を開催している。幅広い包装関連資材の知識を講義と工場見学によって深められる職業訓練校だ。今年3月に第25期の卒業式が行われ、新たに12人



質問や要望に回答できず持ち帰って検討する場面もあった。そんな中、社長の仲長孝氏から専門学校

のエキスパートが巣立っていった。本紙はその中の一人で、卒業生のもとめ役でもあった、ナカオサ（千葉県野田市、04・7125・3101）で働く木下捺々さんにスポットライトを当てた。彼女の熱意ある学びの姿勢と、それを生かす仕事への向き合い方を取材した。

工程まで踏まえた説明対応ができた。メーカーに見積もりを請求する際も、厚みや材質を細かく指定するなど、業務の幅が広がった。

「興味を持つ」が、仕事に生きる

だ。木下さんは仕事の魅力を、自分の仕事で顧客や友人など誰かの生活に結び付く瞬間にあると語る。日常に密着する業界ならではの魅力が、仕事への興味につながった。

一方で「興味がないと難しい業界」とも表現する。現場に出て若者が少なく、同期入社もいない。寂しさを感じることもあった。専門学校で知り合った仲間と悩みを共有できた経験は大きい。

入学となった。意が積極的な学びの姿勢につながった。今、聞かないと後悔する！

中でもフィルムを扱う講義と工場見学

「入社するまで紙の厚みを意識したこともなかった」と苦笑いする木下さんが、今ではプライベートで友人らと話す際、仕事で知った包装資材の話をするのだという。業界の魅力と興味が、木下さんの仕事を支えている。

生活と密着する業界に魅力

学びも仕事も興味を持って

入社3年目の木下さんは、包装用品店「パッケージプラザナカオサ」で外商を担当している。業務上、素材特性などの知識は必須だ。同社工場での営業経験から最低限の知識はあったものの、顧客の

の紹介を受けた。ナカオサにはすでに2人の卒業生がおり、木下さんは3人目の

ラムは緩衝材、外装機械からマテハン機器まで幅広く、木下さんの専門外の科目もあった。

は、木下さんの業務に直結していた。気になったことには質問を重ね、工場見学の会話に興味を持ち、進んで学んだという。

学生時代は英語とインドネシア語を専攻し、独学でビルマ語も学んだ。話者との会話に興味を持ち、進んで学んだという。

専門校で積極的な学びに取り組んだのも、「包装」に興味を持っていったから



ナカオサ

木下捺々さん

「分からないことばかりだからこそ気兼ねなく質問できました。今聞かないと後悔する」と感じ、取り組んだ。そんな熱

食欲に学んだ影響はすぐに現れた。OPPの材質についても、質問された際、製造

専門校で積極的な学びに取り組んだのも、「包装」に興味を持っていったから

力と興味が、木下さんの仕事を支えている。